

## ネパールの大地震被災地における身体障がい者の避難生活支援の実態調査

はじめに

東日本大震災での障がい者の死亡率は一般の人の2倍であった。アジア間の障がい者の連帯とリスク時の支援ネットワークづくりを目指しつつ、障がい者のための防災・減災を考えることは急務である。本研究チームはこれまで、スマトラ沖地震最大の被災地であるインドネシア・バンダアチェ、巨大台風ヨランダに見舞われたフィリピン・レイテ島などで障害者の被災状況・復旧状況を調査してきた。本研究では昨年2015年4月、大震災に見舞われたネパール・カトマンズの障がい者の被害状況を調査した。

### 1. 先行研究

障がい者と災害の関係の研究は極めて少ない。最近になって Matthew W. Seeger (2007) らはハリケーン・カトリナの後の、障がい者と健常者の避難計画、危機対策、情報探索パターンとメディア使用について調査し、障がい者の緊急時の避難計画が不十分であったこと、情報探索にも困難があったことを明らかにした。また Theresa Maja-Schultz ら(2012) は施設に住む高齢の障がい者の25%は精神の問題を抱えており、災害時にはパートナーシップの構築、コミュニケーションシステムの改善、避難所の確定と利用者スタッフのエンパワメントが、怪我の減少、病気の回避又はコントロール、そして救命を左右することを明らかにした。Mark Priestley ら(2007)は、ハリケーン・カトリナとアジアの津波の被災地での障がい者について比較し、障がい者の組織の連携がリソースとなることを指摘している。

リスク・コミュニケーション(“Disaster Communication”)の研究には Daniel B. Friedman ら (2011)が災害弱者とのコミュニケーションのトレーニングプログラムの効果を測り、コミュニティ特有のコミュニケーション (Community-specific communication) を予測することを推奨した。また V. Clerveaux & B. Spence (2009)は子どもの減災教育のためにゲームを使った。Mike Kent & Katie Ellis (2015) は災害時に活躍するソーシャルメディアがユニバーサルデザインでないことを指摘し、Jamie D. Aten ら(2010)も災害時にコミュニケーションこそが命綱であるにも関わらず、コミュニケーションのインフラを保つことが難しいことを指摘し、新しいテクノロジーや、既存のテクノロジーを利用して、災害コミュニケーションを改善することを提唱した。

本研究チームは、フィリピンの巨大台風の被災地レイテ島で、聴覚障がい者のグループ等との交流を通して調査を行い、レイテ島の被害が大きかった理由にやはりコミュニケーションの問題があったこと、避難後も障がい者は親族が面倒をみるべきという伝統が公的な支援を阻んでいることを明らかにした。スマトラ沖地震最大の被災地インドネシアのバンダアチェでも、ほとんど被害のなかった隣の島(シムル島)と比較して、コミュニケーションの障壁や語り伝えの不在が深刻な被害の要因となったことがわかった。また調査と

並行してろう者同士、あるいは学生同士のネットワークづくりも行ってきた。ろう学生を含む学生の交流はそのままコミュニケーションのバリア体験として、多文化ソーシャルワーカーへの動機づけとして、注目され新聞にも報道された（福祉新聞・朝日新聞等）。また代表者齊藤は2015年度までに平和中島財団アジア地域研究の助成を受け、アジア災害時の手話やピクトグラムの研究も行ってきた。

本研究では上記のような実績を元に、昨年（2015年）大地震にみまわれ、死者約8460人、負傷者14,398人という犠牲者を出したネパールのカトマンズで調査を行った。被災時の障がい者の状況、今なお再建が進んでいない街の避難所での障がい者の状況について調査を行った。

## 2. 発災時・復旧時の状況の概要

この地震では歴史的な名所と言われる寺院等の建物が崩壊した。カトマンズのダラハラ塔（61.88mの円柱型の白い塔で、1832年に建設され、この塔を含むカトマンズ盆地はユネスコの世界遺産に指定されている。1934年の地震で倒壊したが、再建された。）は2005年から一般公開されたため観光名所となっていたが、大地震当日（2015年4月25日）崩壊し、登っていた4000人の観光客やネパール人の家族連れ・カップルが死亡した。土曜日であったため、街には多くの買い物客がおり、地震を予想をしていなかった多くの人々が、地震だともわからぬまま大混乱になったという。正気を失った野良犬、牛、山羊などが走り回り、人間に噛みつく動物もたくさんいた。犬に噛みつかれても消毒液をかけただけで、治療は十分にしてもらえない状況ではなかった。病院もこわれて、医師も足りなかったため、よほどの重症でなければ治療はしてもらえなかった。動物にかまれた傷から発熱が続き、生死の境をさまよった人もいた。

発災直後は、どちらが東か西かもわからない砂煙と粉塵であり、ビニール等も飛び、何も見えなかったという。何が起こったかもわからず、壁にしがみついた人々、泣き叫ぶ人々の姿があり、地獄絵図のようで、その時の光景は今も夢に出てくると言う人もいる。ふつうならば15～20分で着く自宅まで5時間かけてたどり着いた人もいる。出稼ぎや、レベルの高い学校に通うために親子でカトマンズに出ている人なども多く、彼らは故郷に帰ることもできなかった。ショックで一時聴力を失ったり、緘黙になった人もいた。

ネパールの建物はレンガ造りも多く、安全ではないため、人々は広場や畑に避難した。テントは国際的支援機関から持ち込まれたが、数は足りず、棒とシートやビニールを調達して自らテントを作った人たちもいたという。余震も2～3回大きな揺れがあり、立ってられない揺れで、皆木に捕まっていたという。

公的支援はほとんどなく、配給は少なく、地方出身者でカトマンズ市民でないとみなされた者には支給されなかったため、知り合いに分けてもらって食いつないだ。食料は発災から2～3日はほとんど何もなく、余震の危険等から家にも入れず、皆テントの近くでた

き火をして眠った。

地震当日に出産となった人の中には、こんな日に生まれる子どもは不吉だと言う母親もいた（インドネシアでは、大地震と津波の日に無事生まれた子どもを皆で喜び、ツナミを意味する名前を付けたというような話があったが、その文化とは異なる）。電話がなく、家族や親せきと何日も連絡がつかない人が多かった。

一か月ぐらいは広場まで物資をもらいに行っていたが、街の中心の広場は事実上トイレになってしまっていて、伝染病の可能性が高かった。

近所の連帯は強く、ともに過ごしたが、発災後、落ち着いてから障害者がいないことに気づくという例もあったという。慌てて探しに行ったら全盲の人が自宅にとり残されていた、という例もあった。乳児は母乳が十分なく、粉ミルクもなく、気温が下がるため、泣き続け、家に毛布になるものだけ取りに行き、また畑にもどって寝るというような生活が続いた。

国や自治体からの配給は少なく、早い者勝ちで、しかもその地域の出身者であることを証明しなければもらえないため手間取ったり、きれいな水も出るところが少なく、遠くまでもらいに行く人も多かった。国際協力も場所が限定されていたが、広場や空き地はテントに占領されて支援の外国人たちのスペースが足りなかった。

その後、大地震が来たときのために皆で備えようという思いはあったが、少し物資を常備するようになったものも、6か月でまた元に戻ってしまった。貧しさから備蓄した食品も食べてしまうという状況があるという。

## 2. 障害者の状況

カトマンズの障害者の学校と施設でインタビューを行った。

カゲンドラ・ニュー・ライフ・スクールは、325名の生徒がおり、そのうち125名が障害児である。障害児以外にも、親が障害者である子どもや、貧困な子どもも受け入れている。地震のために両足を切断したというような子どもも入ってきた。国立ではあるが、教科書や交通費等は寄付で賄っている。オーストラリアからの寄付で4人の教師の人件費を賄っており、また日本人（在日・在ネパール）からも多くの寄付があった。しかし図書館が壊れてしまったままであったり、建物の整備は未だにできていない。莫塵敷の雨漏りのするような教室もあった。併設されている入居施設は1975年女性の施設長が自らパラリンピック（現）で獲得したメダルを売って設立した。発災時には入居の利用者は運動場に立てたテントで暮らしていた。重度の障害者が多かったが皆無事であった。食品の備蓄も二か月分あったという。また名前もわからない人が200個のラーメンの茹で麺を運んできてくれるなど、善意の寄付もあった。

発災時、多くの生徒・利用者は何が起きたかわからず、大変動揺したとのことだったが、教師や施設の職員に助けられた様子がよくわかった。施設の外では、多くの市民が、レンガ造り等、地震に弱い建物が多いため、屋外でテント暮らしを余儀なくされていた。遅々

として進まない復興の中で、街の中心のテントはトイレの設備がなく、不衛生でだんだん暮らすことができなくなったり、テントが足りなくなると、ビニールなどを集めて自分たちでテントを作ったり、食料もなく、また家族と連絡がとれなかった人も多かったことを考えると、特別支援学校や施設はむしろ教師や職員の方で状況はよかった。障害児の学校の生徒は一樣に、恐かったと言っていたが、不自由な暮らしをしたという声はなかった。車いすは施設の外では使えないと言う。未だ道の整備ができておらず、車も多いためである。

一方、カトマンズからバスで6時間のろう学校は山奥にあり、まったく整備されていない道路をカトマンズ中央からバスで6時間かけて訪問した。学校と寮は極めて貧しく、子どもたちの栄養状態は悪く、トイレも十分整備されておらず不衛生であったが、子どもたちは連帯感を持ってろうコミュニティーを作っている様子が実感できた。日本手話とネパール手話を教え合うと、生き生きとしてきて笑顔が見られた。子どもたちは皆ろう者であるが教師は聴者であった。山の中の崖だらけの環境の中に咲く赤い花を集めてきて、我々ひとりひとりのレイを作って待っていてくれた。全寮制であることもあり子どもたちは先生たちに守られて、家族のような連帯で地震を生き抜いていた。

窮状を見て、寄付を募って振り込む約束をし、また案内役のネパール人（本学の卒業生）がカトマンズの自宅の家具や衣類を寄付したいと申し出たところ、我々チームがカトマンズに戻った数日後に、あの険しい山道を校長先生自ら運転し、カトマンズまで追いかけてきて寄附してもらえるものを持って帰りたいと言う。急遽、学生を含むチーム全員で寄付を出し合って現金で手渡しする、というようなこともあった。

おわりに

学校や施設はどこも寄付に頼っているようで、強く寄付を求めると、外国人から寄付を獲得するためにはなりふりかまわない感じが感じられた。インフラの整備が進まない理由として、公費が次々賄賂として消えていくという実態がある。私立学校（健常の生徒）も視察したが、格差は極めて大きく、貧富の差が大きいことは明らかであった。街には物乞いをする人々も多かった。施設や学校にいる人たちについては貧しいながらもある程度守られているが、隠れた弱者はどのように暮らしているのか見えにくい。

現在はどこもテントは撤去されているが、今尚インフラは整備されず、寺院・学校・施設の建物も修復されていない。雨が降ったら使えないような窓のない建物や、莫菴敷の教室もあった。

カトマンズ中央でさえ瓦礫はそのままで粉塵がひどく、マスクがなければとても歩けない。衛生状態は劣悪である。調査に向かった我々やボランティアで同行した学生たちも次々に体調を崩した。多くはウィルス性の腸炎で、買ったミネラルウォーターしか飲まないようにしていても、全員が一度はおなかを壊すという状況で、日本とはあまりに環境が違うことを実感した。

公的な機関やソーシャルワーカーというものの存在は感じられず、一部の豊かな人たち以外はほとんどがコミュニティーの中の助け合いで生き延びてきた。カトマンズは出稼ぎや就学のために地方から来ている人が多く、彼らは戸籍のある場で支援を受けるべきという考え方が広まり、短期滞在者は差別されたという。カーストの名残もあり、人工の大半の貧困問題は深刻である。

多くの市民が貧困で不衛生な環境に置かれていることを考えると、障害のある子どもたちは施設・設備、そして教師などの大人に守られており、文化的にとってもおだやかで明るかった。しかし、施設自体が困窮していることは否めない。隠れた弱者が見えてこなかったが、今後も調査をしたいと考えている。